

ペットは家族か

本論文では、「ペットは家族か」という問いを通して、現代日本におけるペットと人間の関係の変化について考察した。近年、「うちの子」や「ペットも家族の一員」といった表現が広く使われるようになり、ペットを家族のようにとらえる意識が当たり前になりつつある。一方で、法律上ではペットが「物」として扱われているという現実も存在しており、そこに違和感を覚えたことが本研究を行った理由である。

まずペットと人間の関係の歴史を振り返り、かつては実用的な目的で買われていた動物が、時代の変化とともに生活を共にする存在へと変化していったことを整理した。さらに、ペットフード協会の調査データを基に、犬と猫の飼育率や世帯構成別の特徴を分析し、現代のペット飼育がライフスタイルや家族構成と深く結びついていることを明らかにした。

次に、ペットを「家族」ととらえる人々の意識に注目し、特に単身世帯や少人数世帯において、ペットが精神的な支えや生活のパートナーとして重要な役割を果たしていることを示した。その一方で、民法上はペットが依然として「物」として扱われている点を取り上げ、生活の中での認識との間に生じているずれについて考察した。

以上を通して、ペットは多くの人にとってすでに家族に近い存在となっていることが明らかになった。しかし、その位置づけは制度の面では十分に反映されておらず、今後は人と動物が共に生きるための社会の在り方や、「家族」という概念そのものを改めて考えていく必要があると結論付けた。